

ブライトウィッチーズ

大和 公木

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1945年、カールスラントにおいて第501統合戦闘航空団、ストライクウィッチーズが再結成された後の欧州は、未だ第二次ネウロイ大戦の終息が見える気配は無く、次いで新たなネウロイの巣がヒスパニアに出来上がってしまう…。連合軍は、これを殲滅すべく、各国からウィッチを集め、新たな統合戦闘航空団を結成した…。

9つ目の統合戦闘航空団、第509統合戦闘航空団。人はこれを、ブライトウィッチーズと呼んだ…。

劇場版ストライクウィッチーズがカールスラントで再結成された後、1946年から1947年にかけての話と、第二次大戦発生前、1937年頃に勃発していた、扶桑海事変の前後に起こったある事件について描いた、WWSの二次創作小説です。

かなり残酷な描写が出てきますので、予めご注意ください。

結構ぐちゃぐちゃしたストーリーになってます…！

それでも構わない方は…どうぞっ！

目次

序章

序章 　く世界を呪った悪魔く 　―― 1

第一章 　―ヒスパニアを取り戻せ― 第一節くウィッチの旅立ち

いざ欧州へく

第一部 　く扶桑を発つウィッチく 　―― 3

第二部 　くウィッチの卵 　／ 　新しい箒をく 　―― 12

第三部 　く一難去ってまた一難く 　―― 25

序章

序章 〱世界を呪った悪魔〱

1937年8月18日。

扶桑海軍が本格化する直前の横須賀。

街は緊張感が霧のごとく張り詰め、普段なら賑わう商店街も、人氣がいつになく少ない。

空気が絶望的に悪く、外にいただけで吐気を催す者もいたというそんな日に、横須賀は、未知の恐怖に脅かされることとなる。

5時2分。

日の光は厚い黒雲に落ち込んだままで、今にも雨音が響き渡りそうな暗い空と体に纏わり付く強い湿気に嫌気が差す、そんな朝。

一人の男が、基地横の林道を走っていた。

軍事関係車両の往来も多い表通とは違い、裏通となるこの林道には、車はおろか人の往来も少ない。

それ故に、男は普段、往来に邪魔されることなく走り込みをするこ
とが出来ていた。

この日も、もはや日課と化していた走り込みをしていた。

数分ほど走った辺りだろうか。

ふと、横に広がる林の奥から悪臭が漂ってきた。

それも、尋常ではないほどの。

鼻を打つ、なんて生易しい言葉では片付けられないほどの。

男は、あまりの劇臭に耐えかね、鼻を抑えながら引き返そうとした。

が、その場で男は、絶望の表情を浮かべ、血の気が一気に引くのを理解した。

林道と林の境より少し奥…そこに、腸をぶちまけた血塗れの子供が、仰向けに横たわっていたのである。

不気味なことに、その子供の両脇には、彼岸花の花束が手向けられていた。

男は腰を抜かして倒れ込み、それからガタガタと震えながら、地面

を這うようにしながら立ち上がり、元来た方へと逃げ出した…。

1時間後、男から通報を受けた地元警察や自警団、海軍軍人らが、林道脇に倒れた少年を発見し収容、その後、悪臭漂う林の中へと足を踏み入れた。

奥に進むにつれ、悪臭はどんどんと強さを増していった。と、捜査員の1人が何かを踏みつけた。ヌチャツという音が辺りに響き渡る。踏みつけた捜査員が、恐る恐る懐中電灯でそれを照れした瞬間、捜査員らは全員が恐怖に怯えた。

捜査員が踏みつけたのは、腸だったのである。

その捜査員は、絶叫しながら腰を抜かして倒れ込み、懐中電灯を地面に落とした。

落ちた懐中電灯が、下から腸をより明るく鮮明に映し出し、捜査員は泡を吹いて気絶した。

：先程の少年同様に、腸をぶちまけている少年少女が2人、全身の骨が木っ端に砕かれ、人ならざる姿に成り果てた少女が2人、ひときわ大きな木に体をツルできつく縛られ、太い枝で腹部を貫かれた少年が1人：計6名の無残な遺体が発見されたのである。

その無残さといえば、人という原型はもはやなく、その場にいた捜査員の誰もが、その遺体を回収するのを躊躇い、全員がその場で嘔吐したほどである。

さらに、すべての遺体の両脇に、彼岸花の花束が手向けられていたことも、この事件の異様で不気味な姿を如実に映し出していた。

人には不可能な所業であると考えるしかない、いや、人がすることとは到底思えなかった、という方が正しいだろう。悍ましい光景が、目の前には広がっていた。

：後世に、殺人ウィッチ事件として名を残した、最悪の事件が始まった瞬間であった。

第一章　―ヒスパニアを取り戻せ― 第一節　ウイツチの旅立ち　いざ欧州へ　第一部　く扶桑を発つウイツチく

1947年、扶桑皇国青森県大湊町。

ここに、比較的小さな海軍基地があつた。

扶桑皇国海軍横須賀基地大湊分隊基地、通称大湊基地。

遣欧艦隊に合流経験のあるウイツチや整備兵も多く在籍している、扶桑皇国本州最北端の海軍基地である。

1945年9月に勃発した樺太・北方危機の折に扶桑皇国が新設した基地で、戦いが最も激化した際には、参戦していた扶桑、オラーシャ、フアラウエイランド、リベリオンのウイツチや一般兵がやつて来ていた状態であつた。

この基地には現在、ウイツチ部隊である、飛行第一小隊、飛行第二小隊が編成されている。

また、それに合わせて、整備班も分けられている。

大湊分隊は特殊な整備班の構成をとっており、扶桑皇国海軍横須賀基地大湊整備局という、独自の括りとなっている。

大湊整備局は、第一整備班、第二整備班、第三整備班の3つに分けられ、それぞれ、第一整備班がストライカーユニット及びウイツチ使用の武器を、第二整備班が、航空機全般及びウイツチ以外使用の武器を、第三整備班が、船舶及び主副砲や機銃などの艦上使用武器を、それぞれ受け持っている。

このうち第一整備班には、一課と二課があり、それぞれ第一小隊と第二小隊を担当している。

また、大湊整備局の整備兵は、扶桑で唯一武器の常装が認められており、―大湊基地は、ウイツチ以外の戦力が乏しいために、整備兵らが自ら立案したシステム―多くの者が、拳銃やライフルだけでなく、扶桑刀や短刀を常時身につけている。

しかし、その中でただ一人、武器を持たない者がいた。

整備局第一整備班一課所属、百里 焰（もり） ほむら） 一等整備兵である。

普段は温厚で人情味溢れる優しい男で、周囲をまとめあげることが上手く、人望も厚い。しかし、戦闘訓練には参加せず、武器も携帯しない。それ故に、整備班長としての素質は基地の中で一番と言われているが、戦闘行為に参加することを躊躇う臆病者だと言われ、未だに整備班長になれずにいる。焰自身も「俺はそんな偉い人にはなれないよ。」といつも言っている。

同年4月1日。

大湊基地の軍人全員が、港に集結していた。
もちろん例外なく、焰の姿もあった。

港には、横須賀が保有する駆逐艦が停泊しており、物資が大量に積み込まれていた。

その船に、海軍制服に身を包んだ、2人の女性が乗り込もうとしていた。

1人は、扶桑海軍横須賀基地大湊分隊飛行第一小隊小隊長の、習和志野（ならわ）しの）大尉である。

愛機は紫電改二の特別仕様で、焰とその同期の中西 弘（なかにしひろし） 一等整備兵、及び八雲 准（やぐも）じゅん） 一等整備兵が整備・調整を担当している。

通常の紫電改二に手を加え、加速度を低く抑えた分、最高速度までの加速度を常に一定の高さに保つよう設定、結果的に、魔力消費量の軽減を実現しつつも、旋回性と操縦性を向上させ、かつ従来のレシプロストライカーよりも航続距離を伸ばした機体である。

これは、習和の保有魔力量が平均より若干少ないことを考慮した焰による提案で、これが樺太・北方危機の際に、志野の戦果を大きく引き上げる最大の要因となった。

もう一人は、同分隊飛行第二小隊小隊長の百里 日向（もり）ひなた）大尉である。

焰の一つ上の実姉で、数年前に横須賀本隊より志願転属してきた。いちなみに、焰の入隊は、その1〜2年後のことである。

愛機は紫電改二の通常仕様であるため、ここでは特に解説はしない。

二人はこれから、一度横須賀に向かい、遣欧艦隊第290艦隊に合流後、ヒスパニアの南部防衛線に派遣されることになっていた。

「でも、本当に大丈夫？ ついてこなくて。」

そう問うのは日向である。問うた相手は焰だ。

「俺より優秀な整備兵なんて、きつと向こうにいくらでもいるよ。それに、姉さんに渡したメモを見せれば、嫌でも理解してくれるはずだ。」

腰に手を当て苦笑しながら返す焰。

「それにしても、あんた達に整備してもらえないって考えるとねえ…しばらく寂しくなるわね…」

志野もそれに続けて話す。

「それが人事ってやつですから、仕方ないですよ。」

焰が返す。

「そうつすよ！それに、ヒスパニアの戦況が落ち着いて戻ってきたら、俺達が嫌ってほど整備してあげますから！」

次いで八雲が答える。

「お二人の無事と武運、お祈りいたします。そうでないと、我々がお二人の整備を担当する機会が、無くなってしまうですからね。」

最後に中西が答える。

「はははっ。そうだね、うん。必ず2人でここに帰ってくる。その時はまた整備頼むよ。」

「了解っ！」

志野の言葉に、三人は一斉に敬礼をした。

「それじゃあ…行ってきます…！」

志野と日向は、三人に敬礼を返すと、すぐに駆逐艦に乗り込んだ。その後すぐに出港、整備兵や司令部官らが帽振れで送り出す。

十数分後には、陸地は遠くなり、おそらく基地には普段通りの日常が広がっていることだろう。

「すっかり基地見えなくなっちゃったね。」

日向が甲板から基地のあった方を見渡しながらつぶやく。

「そうねー。あ、見てみて、あれ多分箱館よ。」

そのつぶやきに志野が答え、反対側の陸地を指差す。

「あ、そういえば、私たちが2人で任務こなすの初めてだよね？」

「そういえばそうね…」

「じゃあさ、改めて挨拶しない？」

「えっ？うーん…まあいっか…じゃ、これからよろしくね、日向。」

「こちらこそよろしく、志野。」

硬い握手を交わす2人。

そんな様子を、他の軍人や整備兵達は微笑ましく見ていた。

船は既に津軽海峡を超え、太平洋に差し掛かっていた。

横須賀。

呉、佐世保と並んで三大扶桑軍港と呼ばれているこの基地には、主力の艦が数多く籍を置いており、今回ヒスパニアへ向かう空母「葛城」も、その一つである。

十条 真奈（じゅうじょう まな）少佐。

扶桑皇国陸軍第34飛行大隊に所属する機械化航空歩兵である彼女は今、その空母葛城に乗船していた。

彼女は、遣欧艦隊第290艦隊に陸軍から派遣されたウィッチである。

1947年当時でも、扶桑皇国の陸軍と海軍は互いにいがみ合っている状態が続いており、実際近くにいる海軍兵らもまた、気分のいいものとは言えない目を十条に向けていた。

「全く…上層部の唾み合いのせいで、私までとばっちり食らうとか…勘弁してよ…」

はあ…と深いため息をつく十条。

十条には、今の上層部が考えることややっている事は何一つ分からない。というより、端から理解しようとする考えでないわけであるが。

ただ一つ分かることは、扶桑の陸海の犬猿関係に、とつとと幕を下ろす努力が上層部に微塵も感じられないという一点に尽きる。

「いつまでも唾み合ってちや…どうしようもないのにな…」

独り言のようにボソツと呟く十条。

しかし、1人の海軍兵がこれを聞いていたようで、

「唾み合いは陸軍さんが始めたことだろう？ だったら陸軍さんが引けばいいだけじゃないんですかねえ？」と、まるで子どものように嫌味満載の台詞を、十条に聞こえるように言ったのである。

周りの海軍兵らは、おいよせ、ここで喧嘩なんか始めるなよ、と慌てて発言した海軍兵を宥め始める。

十条が今の文言に対して、激昂してくる可能性があったからだ。

しかし十条は

「やっぱりそうですよね…うちが始めたことですもん、そりゃあ陸軍が手を引かなきゃ終わらないっすよね…はあ…さつさとやめてくれないかなあうちの馬鹿上層部…」

と、素直な愚痴をため息混じりに力なくボヤク。

あまりに拍子抜けな反応に、その場の海軍兵は、口をぽかんと開けて固まる。

十条は続ける。

「私は正直、陸海関係なく、皆さんと仲良く出来た方が楽しいだろうし、なにより連携とりやすいだろうにな…って思ってるんですがね…如何せん、陸軍の司令部は、海軍さんのご尤もな指摘に全く耳を貸さないもんでね…みんな口に出せないだけで、現場の人間からしたら、本当にいい加減にしてって感じなんですよ…」

十条は淡々と自身の想いを呟く。誰に対して言うでもなく、ただ独り言のように、しかして皆に語りかけるように。

海軍兵らは、その呟きに、ただ黙って耳を貸していた。

十条は海軍兵らを振り返りこう言った。

「私のような陸軍人がこんな事言うのも変なんですけど、ヒスパニアまでの一月間だけで構いませんから、仲良くしていただけませんか？」

照れながら笑みを浮かべ、後頭部を左手で軽くポリポリと搔きながら言う十条。

返ってきた反応は…無反応。

十条の笑みは、苦笑へと変化した。

『やっぱりダメだったか…』なんてことを思った次の瞬間。

「…まあ、あんたは悪い人じゃないみたいだからな…いいいぜ、一月間だけは仲良くしてやる。」

と、最初に口を出した海軍兵が、こう切り出したのだ。

それに続くように、「私は一月と言わず、ずっと仲良くしますよー！」
「俺、もつと陸軍について知りたいつす！」等々。

続けざまに皆が笑顔で仲良くすると言ったのだ。

「…ありがとうございます…ありがとうございます！」

十条は、精一杯の笑顔でそれに応えた。

…これを機に十条は、陸海間相互の緊張緩和に向け、独自に動き出す決意をした。

1947年4月2日、遣欧艦隊第290艦隊は、間もなく出航準備に取り掛かろうとしていた。

しばらくして、横須賀に、1隻の船がやってきた。

見たところ駆逐艦のようだった。

駆逐艦は、空母葛城のすぐ横に接岸し、積んでいた物資類を、橋渡しの要領で葛城に移し始めた。

乗員や橋渡しが出来ない様な物資は、船から一度下ろしてから葛城に積み直していた。

少しして、2人の女性が葛城の甲板にやって来た。

海軍の白軍服に身を包んでいることから、十条はすぐにウィッチだと気づき、そちらに歩み始めた。

2人も十条の存在に気が付き、歩みをやめ、こちらに体を向けた。

「はじめまして、私は、扶桑皇国陸軍第34飛行大隊所属、十条真奈少佐であります。おふたりは海軍のウィッチさんとお見受けしましたが…？」

丁寧に頭を下げ、挨拶をする十条。

「あ、はい！私は、扶桑皇国海軍横須賀基地大湊分隊飛行第一小隊所属、習和志野大尉です！」

「同じく、大湊分隊飛行第二小隊所属、百里日向大尉です！」

同じように頭を下げる2人。

十条はここで、私の方が階級上なんだ…と思うと同時に、扶桑ウィッチの数が少なくなっていることも察した。

通常であれば、海軍は横須賀や佐世保、呉ないし舞鶴からウィッチを派遣するのが普通であるが、このウィッチ二人は、そのどこでもなく、横須賀の分隊である大湊からやって来たという。

横須賀基地に所属しているウィッチで現状派遣可能な戦力は、基本皆既に欧州に派遣済みだということなのだろう。

それに、海軍のウィッチと共に陸軍ウィッチである十条も派遣するということは、いよいよもって扶桑のウィッチ不足は否めないということになる。

しかし、そう考えた十条は、あることに気づきすぐにその考えを捨てた。

樺太・北方危機の際、一時期最大の拠点となったのは大湊だった。そんな基地なのだから、隠れた強者がいても何ら不思議はない。

十条はそうやって、プラスの方向に考えを引っ張っていった。

「き、今日からしばらく、よろしくお願いします…！えっと、私のことは気軽に名前だけで呼んでくれて大丈夫ですし、敬語じゃなくても全然大丈夫ですよ！」

十条の言葉に、2人は困惑する。

「そ、そんな…上官に対して敬語を省略するなんてできませんよ…」

「私もできません…」

2人とも苦笑で返す。

それならばと十条は、

「でしたら…これは命令ということぞ！」

と微笑みながら返した。

2人は一斉に、「うぐっ…」と唸り、渋々了承した。

「で、でも、何でまた敬語禁止なんて…？」

「うーんと…その前に、2人は今何歳？」

まず志野が答える。

「私は18よ?」

言い終えるより早く日向が続ける。

「私も18!」

「私、17なんですよ…」

苦笑しながらそう話した十条に、2人は驚愕の表情を浮かべたまま固まる。

自分より年下で、自分より階級が上になる事例は、そう珍しくはない。

だが、その年齢と階級が驚きなのだ。

若干17歳にして、自分たちより上の階級である少佐、つまりは佐官という位を得ているという事実には、並々ならぬ実力の高さや経験が滲み出ている。

大尉までの位は、所謂下士官にあたり、まだ大部隊の統率を取るには値しない。

しかし、少佐となれば話は別である。

少佐ということは、大部隊の統率や指揮を任せられることもある。

大部隊との統率となれば、様々な戦術などを駆使し、戦いに挑まねばならない。

それだけに、佐官となるためには、一定以上の実戦経験と戦闘の功績を積み重ね、佐官昇格に必要な試験をクリアしなければならない。

二人は、目の前にいるこの少女は、見た目と話し方こそ年相応の女の子だが、中身はウィッチとして完全に仕上がっているのだと、瞬間的に理解出来た。

同時に、最前線は、これ程の実力者を送り込むことが必要になるほどに緊迫している、という訳なのだろうと、改めて気を引き締めた2人であった。

「そういうことなら私たちに対しても敬語禁止ね!これ、年上命令だから!」

「年上命令ってなによそれ…」

「い、いいんでs…いいいの?」

「もちろん!ね?志野?」

「まあ、お互いに仲を深めて行くのは、今後においても悪いことじゃないからね。私からもお願い。」

「は、はい……じゃなかった……うん！よろしくね、二人とも！」

「ごちらこそ、よろしくね真奈ちゃん！」

「よろしく、真奈ちゃん。」

固い握手を交わした3人は、それから甲板上で談笑を続け、完全に打ち解けたようだった。

大湊から2人を載せてきた駆逐艦への補給も完了し、いよいよ出航することになった。

旗艦となる葛城が、出航の合図として汽笛を鳴らすと同時に動き始める。

港では、多くの人々が手を振り、また帽振れをしていた。

艦隊の乗員らも皆、手を振り、ないし帽振れで返す。

日向達3人も、港の人々に手を振り返す。

ここから、激戦地となっているヒスパニアの西の隣国、ルシタニアのリスボン基地に向かい、リスボンからは陸路と空路でヒスパニア西側国境まで向かうことになっている。

そこから先は、状況にもよるが、臨時拠点のあるグラナダまで進む予定となっている。

前線へ向かうことに対して緊張する者もいれば、これから向かう先での闘志を燃やす者もいた。

そして、最も最前線で戦うことになる少女3人は、やる気に満ちていた。

必ずネウロイからヒスパニアを、世界を守り、人々の暮らしを守るのだと、少女達は決意していた。

その決意は、いつしか少女達の団結へと繋がる。

しかし少女達は、否、誰ひとりとして知らなかった。

この欧州派兵が、これから生まれる悲劇とドラマの始まりであることを……

第二部 くウィッチの卵 / 新しい籌をく

大湊基地より内陸へ数キロほど進んだ所に、とある学校が存在する。

扶桑皇国大湊航空兵学校。

陸海軍問わず、機械化航空歩兵、つまりは航空ウィッチを指す少女達に通う兵学校である。

そんな学校に通う、武山たけやま 実みのりもまた、ウィッチの卵の1人である。

若干15歳の彼女は、保有魔力量、ストライカーの操縦、武器使用時の命中率、反動吸収の精度、シールドの展開速度と濃度、座学の成績など、ほぼ全てにおいて、『並のウィッチ』だった。

ただし、彼女には一つだけ、突出して優れたものがあつた。

それは、『一定範囲内における空間状況の把握』である。

しかも、固有魔法ではなく、純粋な天性のもの。

彼女は、生まれながらにして、この一点については、誰よりも長けていた。

かの有名なカールスラントのスーパーエース、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐の固有魔法には及ばない迄も、それに引けを取らないものを、彼女はそもそもポテンシャルとして持っていた。

そのため、彼女は並のウィッチながら、学内10位以内の総合成績を常に保っていたが、1位と2位だけは取つたことがなかった。

とはいえ、彼女自身は順位などに拘らず、自分が今出来る最善を尽くそうと、そのために人一倍努力していた。

1947年4月2日。

この日は、4対4の集団戦闘訓練が行われることになっていた。

赤組と白組に分かれ、それぞれストライカーに各組の色のステッカーを貼り、ペイントライフルもそれぞれの色を使用する。

実は白組に配置され、チームには成績一位の朝霞あさか 夕佳ゆうかの他、周りから良く特攻隊長と呼ばれている入間いるま 美知留みちる、遠距離狙撃を得意としている横田よこた 花はながいた。

赤組には、成績二位の厚木あつき 広見ひろみと、ドッグファイトを得意とする

館山 立花、飛行テクニクに定評のある小松 美愛、横田よりもさらに遠距離を得意とする田原 志保がメンバーとして揃えられた。

私達は今、赤組の4人と顔を合わせている。

訓練開始前の、互いへの健闘の誓い合いするためだ。

長年大湊では、集団訓練時にはずっとこうしてきたらしい。

誓い合いと言っても、教官の訓練開始の合図に合わせて、自分の前にいる子と握手をして、両肩を軽くぶつけ合うっていう簡単なものなんだけど…

私の前には、自称ドッグファイターの立花ちゃんがいた。

自称とは言ったけれど、立花ちゃんがドッグファイトと得意としているのは事実で、夕佳ちゃんでも、実際1対1になると、結構苦戦するらしい。

向こうさんに美愛ちゃんがいるのもかなり厄介だ、と夕佳ちゃんは言っていた。

確かに、ドッグファイトに警戒しつつ、美愛ちゃんの飛行技術から逃れることは、学年一位二位を取っていても、おそらく難しいだろう。だからこそ、特攻隊長と花ちゃんには、かなり期待している部分もある。

特攻隊長に切り込んでもらって、ドッグファイター立花ちゃんを封じて、飛行技術を得意とする美愛ちゃんは花ちゃんに封じてもらう。

私は全体を見極めながら志保ちゃんの狙撃が当たらないようにみんなに指示、夕佳ちゃんと広見ちゃんの2人でドッグファイトなりなんなりに持ち込んで、1対1に持ち込めるようにしたいところ。

教官が試合開始の合図を出すと共に、私達は握手し、肩をぶつけ合った。

その後、私達は指定の陣地に向かい飛んでいく。

この勝負は、チームが陣地に到着した10秒後から攻撃を開始していいことになっている。

もうすぐ陣地に着くというところで、夕佳ちゃんから声をかけられた。

「実さん、少しいいかしら？」

「なに、夕佳ちゃん？」

「今日、ちよつとストライカーの調子が悪いの…」

「え!?だ、大丈夫なの!？」

「今のところは大丈夫…だけど、作戦にあった、広見とのドッグファイトとは、あまり激しく動けないかもしれない…」

確かに、夕佳ちゃんの飛行は、ただ飛んでいるだけでも、普段よりグラグラしていて、危なっかしく見える。

こんな状態で広見ちゃんとドッグファイトなんてすれば、最悪、ストライカーが空中分解を起こしてしまいかねない。

なんでこんな整備不良に陥ってしまったのかは全くわからないけど、今はそれよりも、夕佳ちゃんがドッグファイトを出来ないという状況を補う、第二の作戦を考える必要があった。

頭の中で様々な作戦を考え、最も今の状況を補うことが出来る手段を模索しつつ、夕佳ちゃんとの会話を続けた。

「これは…相当まずいね…」

「ええ、かなりまずいわ。だから、あなたに力を貸してほしいの。」

「わ、私に？それは構わないけど…一体何をすれば…?」

「それはね…」

夕佳ちゃんが私のそばに来て耳打ちで作戦を伝え終わった直後、陣地到着から10秒が経った合図が鳴り響いた。

「ちよ、ちよつと待って！それ、本当に私に出来る…!？」

「出来るわ、実さん、あなたならね…!」

そう言うと、夕佳ちゃんは先行して海の方へと向かった。

美智瑠ちゃんと花ちゃんは、最初の作戦通り、山側に向かっていた。

私は、最初の作戦であれば、花ちゃん達とは少し海側寄りの場所から敵陣に向かっていき、中央部で全体に指示を飛ばす…というものだったんだけど、夕佳ちゃんの機体不良が発生してるから作戦変更。「こちらレッド・ワン。赤隊各機に、作戦変更の旨を伝えます。現在、レッド・ツーが機体不良により、万全の戦闘が不可能のため、レッド・ワンはこれより、レッド・ツーの支援及び白隊の対処に当たります。

レッド・スリー、レッド・フォーは、所定の作戦空域A2ではなく、その先のポイントA3へ移動してください。」

『どえええ!?!ちよ、機体不良って、大丈夫なんすか!?!』

「レッド・ツーは、今のところは大丈夫です。戦闘に多少の影響がある程度で、現状、飛行には問題がないと判断しています。」

『それならいいけど…:一対一に持ち込む作戦は…?』

「それは不可能と判断したので、レッド・スリー、レッド・フォーには、とにかくA3周辺に白隊をおびき寄せるように行動するようお願いしています。」

『:分かった、指示に従うわ。レッド・フォー、所定ポイントA2から、第二ポイントA3へ移動、作戦行動に入ります。』

『了解つす…:!レッド・スリー、レッド・フォーに続き、A3へ移動、作戦行動に入るつす!』

「スリー、フォー、作戦行動移行了解です。次いでレッド・ツー、聞こえますか?」

『レッド・ツー、無線には異常はない。』

「良かった…:今からレッド・ツーに合流、あとはさっきの通り、例の動きで行きます。」

『了解した。後方1500にレッド・ワンを視認した。』

「こちらもレッド・ツー視認。合流します。」

実戦的な無線による作戦変更の通達、訓練を開始してから、初めてやったけど、案外うまくできるものなのか…

「お待ちせレッド・ツー。」

「ん。それじゃああとは私についてきて。」

「了解…:!」

私と夕佳ちゃんは、直ぐに訓練空域の中央付近へ向けて飛行を開始。

A3に美智瑠ちゃんと花ちゃんを集めたのは、2人に白隊を引き付けてもらい、私たちの動きをギリギリまで悟らせないようにするため。

私たちも、ギリギリまで気づかれないようにするため、中央付近ま

ではとにかく低空飛行をして、白隊の視界に入らないように注意することになった。

「ユニットの方はどう？」

「ダメね…さつきから言うことをちゃんと聞いてくれないわ…」

「うーん…一体なんでだろうね…？」

「それが分かれば苦労はしないんだけどね…それより今は、訓練を完了することだけ考えましょう。それに、完全に制御が効かないよりはマシよ。」

「それもそうだね…！あ、そろそろじゃないかな…？」

「そうね…じゃあ実さん、始めましょうか？」

「…了解！レッド・ツゥー、お願い！」

「レッド・ツゥー了解…！」

ここで、夕佳ちゃんは私の額に手を当てて目を瞑る。

すると、夕佳ちゃんの体から魔法力が溢れ、夕佳ちゃんの体を覆うように青く輝き始める。

夕佳ちゃんは、この学校でたった二人しかいない固有魔法の使い手のひとりで、使う固有魔法は複写。

複写は、その相手が使う固有魔法、又は得意としていることを一つだけ、全く同じように使うことが出来る魔法だと聞いている。

他に複写を持っている人は、世界にもほとんどいないという。

ちなみにもう一人は白隊の広見ちゃんで、固有魔法は強化。

夕佳ちゃんは、この複写を使って、私の得意としている状況把握を自身に複写しようとしている。

そう、夕佳ちゃんが私に提案した作戦は、『私と夕佳ちゃんの立場を逆にする』という大胆なもの。

周りを見渡し、ドッグファイトを避けながら支持を飛ばし続けるという私の立場に夕佳ちゃんを置くことは、確かにそれだけで、ストライカーの不調による心配は少し軽減される。

しかしだとして、私の方に問題が出てくるというものだ。

元々ドッグファイトが苦手というわけでないにしても、今回は相手が悪い。

オールラウンダーでかつ中でも得意なのはドッグファイトだという広見ちゃん、対して私は苦手でもなければ得意でもないという中途半端で、平凡で、なんとも相手が悪いとしか言いようのないこの組合せ。

夕佳ちゃんの代わりとして戦うことは、果たして出来るのだろうか
と不安になる。

そんなことを考えているうちに、夕佳ちゃんは複写を終えたらしい。

「実さん、無事終わりましたわよ……！」

「あ、うん！分かった！レッド・ワン、第二次作戦行動に入ります！」

「レッド・ツー了解……レッド・ワンの続行に入る！」

うじうじ考えても仕方が無い。

今の夕佳ちゃんは、普段の3分の1を戦えないだろう。

だが私なら、夕佳ちゃんの5分の3くらいは戦えるはずだ。

広見ちゃんに勝とうとは思わず、引き分けに持ち込むことを最低目標に定め、私達は空域中央のB2エリアまで、なるべく低空飛行で進んで行った。

その頃、大湊基地の普段使用されていないハンガー内では、3人の整備兵がとあるストライカーを整備していた。

その3人とはもちろん、百里 焰と中西 弘、そして八雲 准だ。

3人が整備している機体は、未だ誰も履いたことがない新型機である。

ちなみに、機体の名前は、希望の翼をカールスラント語に直した、Die von Fl・geln Hofnungから単語を抜き取って、「ディフォン・フリーユグ」と名付け、DF10として扱っている。

ちなみに、カールスラント語を採用した理由は、単に3人がカールスラントという国が好きだったからだ。

この機体は、3人が機体整備などの仕事の合間を縫って、密かに一から作り上げた最新機で、その存在は、大湊基地の司令官とその周囲の数人にしか知らされていない。

新型機の開発は、3人が運営している、大湊重工という企業が行っており、扶桑からの支援の元、二年ほど前から取り掛かっていた。

そして先日、遂に新型機が完成、試験機器を用いての起動試験を行ったものの、そこで不良箇所が幾つか見つかり直ぐに修正し再度試験、しかし不良が出たため再び修正をして…の繰り返しだった。

そして今も、その修正作業の真っ最中。

八雲がふと愚痴をこぼす。

「しっかし…これだけバラして修正してもまだ不良箇所が出てくるってのは…一体どうなってるんだ…」

中西も釣られ、

「本当ですよね…いつまで修正を繰り返せばいいのか、全く鬱になりそうです…」

とボヤク。

これに焔が答える。

「俺達は無いものを作ろうとしてるんだ…新しいものを作るってことは、それ即ち答えなんてものが端からない物を作るってこと…だから大量の不良箇所が何度も出てくるのは仕方ないことなんだ…それを、修正に修正を重ねて、ようやく完成させるのが普通なんだ…どれだけ重ねたらいいのかなんてのは、出来てみなきやわからない…多分この作業は、必要に応じてまだまだ繰り返すことになるだろうよ…でもよ、多分完成した時の喜びは、そりゃあ一入だと思う。その喜びをしっかりと味わうためにも、2人とも、最後まで頑張ろうぜ？な？」

その言葉に、2人は笑顔を見せ、

「おう！やってやろうじゃねえか！」

「ええ！必ず完成させましょう！」

と、再び整備に取り掛かり始めた。

士気は上がっている。このまま行けば、スグに今回の修正作業は終わるだろうと、焔は考えていた。

しかし、予想以上に修正は難航した。

新型機に搭載した新機構のイーテル・リアクターが正常に機能しない問題の修正が、全く解決出来なかったのである。

今までのストライカーユニットでは、エンジン稼働用にエーテルと混ぜ合わせて使用する特殊な燃料を用いており、万が一の際の予備電源用バッテリーも搭載していたため、その分、航続距離や性能を向上させようとする、機体が大きく、又重くなつていくという欠点があった。

各国各企業とも、その欠点を何とか打開しようと、様々な案を考案、開発してきたが、やはりそれでも限界があり、扶桑が全力を尽くしてサイズも重量も抑え込んだ震電ですら、紫電や紫電改に比べれば、全体で約5%大きくなっており、重量も1.8kg増している。更にそれを改修した震電改は、改修前より約2.2kg重量が増している。

これに対する改良案も幾つか提示されたが、どれも技術的な問題が重なり、開発には至らなかったのである。

樺太・北方危機勃発後は、改良案の提示や開発の話も聞かず、このまま限界の壁を破ることは出来ないのではないかと思われていた。

しかしそんな中、カールスラントと扶桑の共同研究チームが、ノイエ・カールスラントにて、エンジン周りのシステムを大幅に改良、燃料の代わりに大気中の窒素を過給器より機体内部に取り込み、増幅された魔法力と掛け合わせて燃料に変換し、さらにエーテルとこれを混ぜ合わせ、エンジンを動かすという史上初の改良に成功、これにより、従来のストライカーユニットの総重量を30%〜45%削減することが可能となり、以後のストライカーユニット開発に絶大な影響を与えた。

カールスラントと扶桑の共同研究チームは、この燃料変換器を、エーテル・リアクターと名付け、世界にその技術を提供した。

エーテル・リアクターは瞬く間に各国の新型機に試験搭載され、その威力と実力を発揮した。

燃料変換のために魔法力の増幅量を増加させている関係で、軽量化とも相まって、各国はそれぞれストライカーによる最高速度記録を次々に更新し、リベリオン合衆国に至っては、帝政カールスラントのお隣、ベルギガのサン・トロロン空軍基地での第501統合戦闘航空団による公式テストにおいて、世界最速となる1,127km/hとい

う亜音速を記録するなど、レシプロストライカーの限界を打ち破る途轍もない成果を上げた。

その直後に焔たちは、このエーテル・リアクターをさらに改良し、窒素と魔法力の量を抑え、かつエンジン質力を向上させようという無謀な挑戦に打って出た。

開発は難航するかと思われたが、3人の天才的なまでの閃きの数々により、あっという間に開発は成功、世界各国に新型エーテル・リアクターを商品として販売、カールスラントと扶桑の研究チームを大いに驚かせた。

更に焔たちは、エーテル・リアクターの次なる改良案を示し、燃料変換に魔法力を一切使用せず、100%窒素化しようと考えたのだ。

流石に3人だけでは難しいと考えた焔たちは、研究チームに対し開発協力を依頼、そして現在に至るといふ訳だ。

新型機であるDF-O型は、その最新型エーテル・リアクターを搭載した試験機なのだが、窒素だけを燃料化することに難航し、開発開始から早二年が経ってしまった。

形は出来上がったものの、変換時にリアクターから高温の熱が発生するトラブルから始まり、エンジンに直接燃料が降りかかるトラブルや窒素変換が出来なくなるトラブルなどが続き、修正作業は32回を数えていた。

今回の修正作業は、エンジン出力があまりにも低すぎるというトラブルを改善するため、窒素の燃料変換量と燃料噴射量を向上させるといふものなのだが、そのための妙案が見つからない。

3人は時に頭を抱え、時に首を傾げながら唸り、時に腰に両手を当てて深い溜息を吐きながら頭をガクツと落としていた。

「…考えても出てこないなら、今日の作業はここまでにしたらどうだ？」

ふと、ハンガーに女性の声が響く。

3人はその声に振り向く。

声の主は、大湊基地の司令官、小松美香子、階級は中佐であった。

樺太・北方危機収束まで現役の航空ウィッチとして飛んでおり、直後に上がりを迎えたためウィッチを引退し、扶桑海軍ウィッチの教育・育成を支援、その後、幾つかの暫定的な部隊の指揮・統率を歴任、現在では、その暫定部隊をひとまとめにした、この大湊基地の司令官を務めている。

3人は直ぐに敬礼をし、小松がこれに返礼。

直後に焔が口を開く。

「小松中佐、こんな外れまでわざわざ見にいらしたのですか…?」

「なに、お前達が新型機の調整に苦戦しているのは知っていたからな。差し入れと…激励、とまでは行かないが、なにか言葉をかけてやれないかなと思っつてな。」

そう言う小松は、手に持っていた風呂敷包みの箱を机におき、風呂敷を解いた。

包みの中身は重箱で、その中にはおはぎがぎつちりと詰まっていた。

「これは…?」

「お前達が疲れていないか心配でな…私が先日作ったものの残りではあるが、持ってきた。あまり上手く出来ていないとは思うがな…」

「そんな…我々にこのようなの…よろしいのですか…?」

「樺太・北方時代からの仲だろうか?遠慮はいらんさ。」

3人は一斉に、いただきます。といって、おはぎを手に取り、一口食べた。

「…うめえ…!」

3人は一斉にそう言うと、次々におはぎを手に取り、うまいうまいと笑顔で呟きながらむしゃむしゃと頬張り始めた。

小松はこれを見て、

「美味しそうに食べてくれるのは嬉しいが、喉には詰まらせるなよ…?」

と苦笑しながら注意した。

ある程度食べたあと、小松も含めた4人で、ゆっくりとおはぎを食べながら、現在の状況を簡単に説明した。

「なるほど…それはまた致命的だな…」

「ええ…全くだいい発想がなくて…」

「こればかりはもうどうしようもないんじゃないかねえかあって思ってきてるんすよ…」

「まあ、新技術開発とはそういうものだとは思わがな…私も助力できればいいんだが…」

「いえいえ、お気になさらないください中佐。」

4人はそれぞれ、ああでもないこうでもないと思いを示してはそれはこれが理由でだめだと否定するということを続け、気がつけば1時間が経とうとしていた。

「あ、そういえば中佐…司令官としてのお仕事の方は…？」

「む、もうそんなに時間が経ってしまったか。どれ、どれほど書類が溜まっただろうか…」

「え、小松中佐、もしかして書類わざと溜めてるんですか？」

「ああ、わざと溜めている。ちまちまと少ない仕事をやり続けるより、溜めた仕事をババっと一気にやってしまう方が性に合っていてね。」

「あんまり溜めすぎは良くないっすよ？」

「分かっているさ。だからある程度溜まった頃合を見計らって仕事に戻っているのさ。さて、それじゃあ私はそろそろ仕事に戻るとしよう…お前達も無理はするなよ？お前達はこの基地で最も優秀な整備兵だ。体を壊されたりでもされたら、私の後輩達が大変だからな。」

と、この会話の流れで焰が何かを閃いたようで…

「わざと…溜める…少ない…一気に…？」

「…焰、どうした？何かあったか？」

「…そうか…変換効率を上げる必要はない…溜めればいいんだ!!」

そう言うとき焰は真っ先に自前の製図台へと向かい、そこに書かれていた新型エーテル・リアクターの設計図の一部を書き換え始めた。

「お、おい焰！なんか閃いたのか!」

「ああ！閃いたさ！窒素の変換量を上げる以外に、噴射量を上げる方法！」

「い、一体それはなんですか!?!」

「…溜めるのさ!」

「…は?」

この言葉に、中佐は突然、

「アハハハハ!なるほどな焰、私の書類と窒素を置き換えて考えたんだな?」

と笑いながら聞いてきた。

「はい!まず最初に窒素の吸気箇所とエーテル・リアクターを2つに増やします…!」

「だ、だけどそれじゃあ、エンジンの初期起動時の必要燃料量を大きく上回って、エンジン自体に火がついちまうって…」

「そう…!だから、噴射口を2箇所にするんだ!」

「2箇所に…?」

「そして、初期起動からハンガー射出までは1箇所の噴射で、射出した瞬間から、2箇所目から噴射を開始する…!」

「そうか…その間、2箇所目のエーテル・リアクター内部に、窒素燃料とエーテルを溜め込めば…」

「そういう事です中佐!飛行時に必要な量を上回る燃料が機体内部に貯蓄されます!」

「それに、窒素は軽いから機体の重量増加には繋がらねえ…!貯蓄機能はエーテル・リアクターちよちよつと弄りやどうにでもなる!」

「必要以上の燃料が溜まって、かつそこにさらに追加で燃料が入ってくるから、燃料不足には陥らないと…!これなら…行けるかも知れませんがせんよ焰さん!」

「ああ…!一か八か、やるしかない!中佐、あなたのおかげです!」

「わ、私は何もしてないぞ…?だがまあ…役に立てたみたいで良かったです。頑張れよ、3人共!」

「はい!!」

それから3人は、ユニット整備が終わっていることをいいことに、ひたすら作業に没頭し、遂にその新機構が完成した。

「これで…完成だ!」

「よっしやああ!!」

「早速テストを…」

3人がDF-0の起動試験をしようとしたまさにその時。
ウウウウウウウ!!というけたたましい警報音が、突如として基地に流れた。

「なっ!?ふざけんなよ!?ネウロイがなんでまたこっちに!?!」

「半年ぶりの本出撃だな…!」

「くっ…!仕方ありません、急ぎましょう!」

3人は慌ててハンガーを飛び出し、出撃準備に備えるため、第一ハンガーへと走り出した。

まさかこの戦闘で、DF-0がまさかの人物によって出撃することになるとは、この時は誰も知る由もなかった。

第三部 一難去つてまた一難

『訓練中止！訓練中止！速やかに最寄りの飛行場に緊急着陸し、シエルトターに避難せよ！繰り返す！訓練…』

訓練開始から少し経って、まもなく会敵するかなと思っていた時、耳を劈くような音量で、インカムに教官からの緊急無線が届いた。

それと同時に、街中に不気味な警報が鳴り響いた。

もう嫌という程聞いてきた不気味な音に、体は一気に緊張状態へと変化する。

「ネウロイ警報…!!」

「訓練はこれからだと言うのに…仕方ありません。実さん、指示通り速やかに着陸しましょう。」

「そ、そうだね…レッド・ワンより赤白全機に通達。速やかに最寄りの飛行場…いえ、海軍大湊基地にアプローチをする準備をしてください。繰り返し、無線封鎖を解除し、速やかに海軍大湊基地にアプローチをする準備をしてください。」

『…ホワイト・ワンよりレッド・ワンへ。海軍大湊基地へのアプローチ準備了解。白隊は全機合流済みですので、赤隊の方々、大湊基地手前で合流しましょう。』

「白隊全機合流了解です。レッド・ワンより白隊全機、赤隊とはポイントD6付近で合流してください。」

『白隊全機了解。オーバー。』

「次いで赤隊全機に通達。赤隊はポイントD4エリアで合流しましょう。速やかに移動を開始してください。」

『レッド・スリー了解しました。フォーと共にD4に向かいます。』
「了解。オーバー。」

こういう時は、民間飛行場よりも大湊基地に着陸するのが最も安全だろうと判断し、すぐに全機に連絡した。

その時夕佳ちゃんがボソツと、「実さんってやっぱり判断力が凄いわね…」と言ったのを、私はうっかり聴き逃した。

ポイントD4に着いた実達は、その後ポイントD6付近で白隊と合

流した。

「あれ夕佳、なんでそんなフラフラしてるの？」

「私のストライカー、何故か調子が悪いのよ…」

「えっ、夕佳も？」

「夕佳もって…もしかして広見さんもなの？」

「うん…なんだかいつもよりずっと飛びづらいn…」

広見の言葉は最後まで続かなかった。

何故なら、実のストライカーの右足側が、突如爆発音を轟かせて火を吹いたのだから。

「うわあ!？」

「実!？」「実さん!」「みの!」「実ちゃん!」

こうなってしまうては、実は空にいることは出来ない。

段々と、しかし確実に、少しずつではあるが、しかし遅くはない速度で高度が下がっていく実に、周りには必死に手を差し伸べる。

実は直ぐに手を伸ばして立花の手を取り、すかさずストライカーの出力を0に落とす。

自然とストライカーが足から脱げるが、下で花がそれを回収、火を吹いていた右足側のストライカーをすぐさま持っていたタオルで包み、火を消す。

実の右足は至る所から血が流れており、やけどの跡も多数見られた。

「あ、危なかった…ありがとう立花ちゃん…」

「大丈夫、気にしないで…!それよりも問題は…」

「夕佳と私に続いて実までストライカーに不良がある…これは偶然じゃないかもね…」

今彼女達が履いているストライカーは、三つの整備班が整備したストライカーであり、夕佳と広見、そして実のストライカーは、それぞれの整備班によって、別々に整備されたストライカーである。

だと言うのに、別々に整備されたはずの3機のストライカーがいずれも故障し、拳銃に内部から火を吹き出したのだ。

このことから分かることはただ一つ。

訓練参加中の全ユニットが破損している可能性があるという事だ。

大湊基地までは残りわずかだ。

実はこの緊急事態を知らせるために、すぐさま大湊基地に無線連絡を取った。

「メーデー！メーデー！こちらは訓練中だった大湊航空兵学校の学生です！現在、訓練参加の8名すべてのストライカーに、何らかの異常事態が発生している可能性があります、飛行に著しい影響が出ている学生が3名います！そちらの基地に今すぐ緊急着陸をさせて下さい！繰り返します！こちらは…！」

実達は、いつ止まるか分からない自らのストライカーを、生きてきた中で一番慎重に操縦しながら、早く着陸したいと考えていた。

「遅れました！状況教えてください！」

実達から緊急着陸の無線が入る前、第一ハンガーに駆けつけた焰達は、すぐさま現状確認に務めた。

「目標は現在八戸沖15,000、規模は中型5、小型20、攻撃部隊と思われれます！」

「了解！総員、すぐさまストライカー全機の発射用意を開始！」

班長が全員に指示を出す。

「発射用意が完了次第、離陸準備、滑走路安全確認、離陸航路上の障害確認を開始！各発射設備には、必ず1人付け！いいな！」

『了解！』

所定の指示を行い班長もストライカー発射用意を開始する。

「一番から五番、発射、用意よし！」

「航路上、障害ありません！」

「射出準備完了！いつでも行けます！」

「迎撃部隊用意よし！スワン・ワンからスワン・ファイブ、出撃します！」

「射出開始！」

まず第一ハンガーから5人が出撃、それに続いて第二ハンガーから5人が出撃していった。

それと入れ替わるように、大湊航空兵学校の生徒らから救難信号が

入っていることに隊員が気づき、すぐさま第三ハンガーを開け放ち、受け入れ態勢を取る。

『メーデー！メーデー！こちらは訓練中だった大湊航空兵学校の学生です！現在、訓練参加の8名すべてのストライカーに、何らかの異常事態が発生している可能性があり、飛行に著しい影響が出ている学生が3名います！そちらの基地に今すぐ緊急着陸をさせて下さい！』
「こちら大湊基地管制、救難信号を受信、着陸を許可、速やかに着陸してください！」

『了解！着陸体制に入ります！オーバー！』

その無線を聞いた整備兵らが一気に緊張する。

そして、整備班長が宣言する。

「よし：聞いたなお前ら！今から8機、飛行に影響のある破損を受けたストライカーが着陸してくる！万が一、着陸に失敗したウィッチが出た時のために、緊急着陸受け入れ用のマットと網、それと救護用担架を用意しろ！消火器も忘れんじゃねえぞ！それと誰か、救護班の連中にも声掛けといってくれ！」

『了解！』

隊員らは先程以上に迅速に緊急着陸に向けた準備を行っていく。

程なくして、上空に8人のウィッチが見えてきた。

2人のウィッチが、左右を別のウィッチに支えられたまま、滑走路にアプローチしてくる。

次いで、4丁ものペイントライフルを背負った1人のウィッチを背負い、少し焦げたタオルに包まれたストライカーを抱えたウィッチがアプローチ体制に入る。

よく見れば、左右を支えられたウィッチのストライカーは、プスプスと煙を吐いているのが分かる。

整備兵達に、より強い緊張が走る。

消火剤、担架、防護マットなど、用意出来るものはすべて用意してあるが、何が起こるか分からない以上、油断は禁物。

全神経を集中させ、全整備兵が緊急着陸に備えた。

その中でも3人、冷や汗を流しながら現場で着陸を見守る整備兵が

いた。

それは、先刻までストライカーの開発に勤しんでいた、焔、弘、准だった。

中でも焔は、血が出るほど握る拳に力を入れながら見守っていた。

「頼む…実…無事に降りてこいよ…！」

「全機、緊急着陸に備えて！」

「「「「了解！」「」」」」

実の緊急着陸前最後の指示を聞いた7人は、慣れない緊急着陸に備え、今一度飛行に集中した。

「まず広見ちゃん達から降りて、続けて夕佳ちゃん達が、最後に私たちが降りるようにします！」

「了解。でも立花さん、大丈夫なの？」

夕佳の質問に立花は、

「実は今の私のストライカー、いつもより調子良くてさ、だから今なら大丈夫！時間経ったら分かんないけど…！」

と答えた。

「なら、上空での待機時間は少しでも短い方がいいね。」

即座に広見が反応、全員が改めて気を引き締める。

「よし…じゃあ基地に通信繋ぐよ…！」

「お願いします、実さん。」

夕佳のその言葉に、実はしっかりと頷く。

「訓練レッド・ワンより大湊基地。ただいまより、緊急着陸に入ります。先にホワイト・ワンからホワイト・スリーまでの3機が、次いでレッド・ツーからレッド・フォーまでの3機が、最後にレッド・ワンとホワイト・フォーの2機が、それぞれ着陸します。」

『了解した。くれぐれも、慎重に頼む。オーバー。』

そう言っつて切れた通信を合図に、最初のホワイト・ワンからホワイト・スリーまでが先行して滑走路へと向けて高度を下げ始めた。

続けざまに、レッド・ツーからレッド・フォーが同じように高度を下げ始める。

「立花ちゃん、慎重にお願いね。」

「うん……」

最後になつた実と立花も、徐々に高度を下げ始める。

ウィッチ1人とストライカー1式、そしてペイントライフル4丁を抱えている立花は、通常よりも何倍もシビアな操縦が求められる。

『前3機、降ります！』

ホワイト・ワンの無線が飛ぶ。

慎重に滑走路に進入していく前3機。

そして無事に着陸し、すぐさま格納庫内へ誘導されていった。

続いて赤隊3機も無事に着陸していく。

最後は実たちだけだ。

慎重に高度を下げていく立花。

そして、ようやく無事に着陸した。

少しずつ速度を落とし、格納庫に入る。

そうして、何とか射出ハンガーの前につき、実は整備兵に抱えられ、すぐに怪我の治療を受ける。

立花もストライカーをゆっくりハンガーに固定し、それを脱いですぐに実の元へと駆け寄る。

既に治療を始めていた医療班に立花は詰め寄る。

「実ちゃんの足は大丈夫なんですよね？」

それに医療班はすぐに回答した。

その直前、他の6人も駆けつけ、その言葉を聞く。

「問題ありません。怪我の程度もやけども、軽傷レベルです。完治までは少しかかるでしょうが、今日か明日には、戦闘は無理ですが、再び空に戻れますよ。」

「よかったア……」

怪我の程度が浅いと分かった8人は、揃って安堵のため息をついた。

「無事か！お前達！」

そう声を荒らげて格納庫に入ってきたのは、焰だった。

それに続けて、弘と准も入ってくる。

広見がすぐに返答する。

「7人は無事、実が右足に怪我を負いましたが、軽傷だそうです、百里教官。」

「そうか…それで済んだなら本当によかった…あのストライカーの状況から見て、もっと被害が出ていてもおかしくはなかったからな…」

そこで、夕佳が質問をする。

「私たちのストライカー、そんなに酷かったのですか…?」

その質問に、焰は怒りを僅かに滲ませながら、こう答えた。

「朝霞夕佳訓練生、厚木広見訓練生、武山実訓練生、以上3名のストライカーに、何者かが意図的に不良が出るように細工をしていたことが判明した。」

その言葉に、8人は驚愕するしかなかった。

焰はさらに続けた。

「今回の件は、はつきりいつて許されるべき事案ではない。細工をしたのが誰なのか、俺達で突き止める。それまでは、全訓練生の飛行訓練を中止する方向で学校側と協議、先程決定した。」

焰が放つ怒りのオーラに、周囲は息を呑んだ。

「この件は、俺がすっかり蹴りをつける。俺たちが手塩にかけて整備したストライカーに、こんなことをした罪は必ず償わせる。」

それだけ言うと、怒りのオーラが急に息を潜め、それから微笑みながら8人に語りかける。

「あの状況の中、緊密に8人で連携し、無事に着陸できたことは、賞賛に値するよ。教官達もよくやってくれたと褒めていた。あとは俺達でやっておくから、みんなは先に宿舎に帰って…」

その言葉が最後まで続くことは無かった。

『こちら小牧！敵の勢力が強大すぎて対処できません！応援を要請する！繰り返す！応援を要請する！』